立教英国学院通信

第二七五号　二〇一七年三月十二日
発行者　立教英国学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK　RH12 3BE
http://www.rikkyo.co.uk

卒業終業礼拝

祝辞

在英国日本国大使館総括公使兼総領事
宇山　秀樹

卒業を迎えられた立教英国学院小学部・中学部・高等部の生徒の皆さん、本日はご卒業誠におめでとうございます。お子様の成長を見守ってこられ、この日を感慨深く迎えられた保護者の皆様、そして、子供達を卒業まで導いてこられた先生方、関係者の方々にも、心からお祝いを申し上げます。今日は、最近には珍しく、心地よく晴れた日となって、天気も皆さんの卒業を祝福しているかのようです。

私が立教英国学院にお邪魔するのは、昨年の卒業礼拝、秋のオープンデイに続いて三回目です。オープンデイを見に来て強く印象に残っているのは、展示でも模擬店でもパフォーマンスでも、生徒の皆さんがとても活き活きとして、チームワークで力を合わせて創造する喜びに満ちていたことです。緑豊かな広大なキャンパスと立派な設備、日本国内ではなかなかないこの素晴らしい環境の中で、大家族のような寮生活を送りつつ、厳しくものびのびとした教育を受けられるこの学校だからこそ、あのような素晴らしいイベントができるのだろうと思いました。皆さんは、ご家族と離れた全寮制の生活に慣れるまでは寂しい思いもし、いろいろ苦労があったと思いますが、この学校で得られたことは苦労をはるかに上回るものがあるのではないでしょうか。

今日卒業していく皆さんには、この学校で学んだことを基礎としつつ、グローバルな視点を持って、国際社会の中で日本の未来を担っていく人材となることを期待しています。こんなことを言うと、荷が重いと思うかもしれませんが、皆さんは、そのための素養をここ立教英国学院で身につけてきたはずです。

さて、皆さんの将来に大いなる期待を込めつつ、今後頭の片隅に置いてもらいたいことを三つ申し上げたいと思います。

一つは、日本人としてのアイデンティティと誇りを保ちながら、異なる文化や価値観を理解し尊重できる寛容な心を持ってほしいということです。このことは、最近世界各地で多様性や違いを否定しようとする独善的な風潮が広がる中で、特に重要です。皆さんは、ローカルコミュニティとの様々な交流、ホームステイ、短期交換留学、大学のワークショップへの参加等々、日本国内ではできない貴重な経験を沢山して、英国の文化や習慣、英国人の考え方、また、多様性を大切にする英国の懐の深さにも触れてきたことと思います。同時に、日本の優れた点、世界に誇れる美点を再発見することもあったのではないでしょうか。自分の母国、文化を理解した上で、多様性を受け入れられる国際人を目指していってほしいと思います。

二つ目に、失敗を恐れずチャレンジする精神と、困難に立ち向かうたくましさを持ってほしいと思います。これから先の人生、楽しいことや成功ばかりではなく、壁にぶつかって悩むこと、辛いこともいろいろあるでしょうが、失敗は成功のもとと言いますし、努力して逆境を乗り越えれば、人間強くなるものです。私自身も、そういう経験があります。もう三十年も前の話ですが、外交官になることを目指していた私は、外交官試験に二年連続で落ちてしまったため、或る鉄鋼会社に入社し、北九州で働くことになりました。しかし、このまま長年の夢を諦めてしまっていいのだろうかと自問して、ある日、もう一度だけ試験に挑戦しよう、それでも失敗したら悔いなく会社で働き続けようと決めました。その後半年ほど、古くて汚い独身寮の六畳一間に同期入社の仲間と二人住まいというプライバシーゼロの生活、特に最初の一ヶ月半は新入社員の現場研修で、ヘルメットをかぶって工場で汗を流して夜勤するという、およそ勉強には適さない環境でしたが、そういう逆境にあったからこそ、かえって本気で勉強できた気がします。その結果、三度目の挑戦で外務省に合格しました。この経験が、その後の私にとって様々な困難に対処していける精神力・忍耐力を養ってくれたと思います。皆さんも、これから先どんな困難に直面しても、挫けずに努力し、チャレンジしていく、精神的な強さを是非身につけていってください。

三点目は、真実・事実を見抜くことのできる目を養ってほしいということです。インターネットやスマホはとても便利ですが、ネット空間には偽情報や根拠の不確かな情報も飛び交っています。「もう一つの事実（alternative facts）」などと称する嘘に踊らされる人々も増えています。民主主義が正しく機能し、基本的な自由や人権が守られる社会を保つためには、有権者がデマに踊らされず、事実に基づいて判断をすることが不可欠です。様々な情報が溢れる中、何が事実で何が嘘かを見抜く目を養うには、良い本を沢山読むこと、歴史を学ぶこと、また、定評のある新聞を複数読むことをお勧めします。もちろん、定評のある新聞であっても全ての報道が正しいとは限りません。一つの情報を鵜呑みにせず、常に自分の頭で考える力を鍛えてください。そして、疑問を持ったら、複数のソースで調べてみる習慣を身につけてください。皆さんはこれまで立教英国学院でいろいろなリサーチをしたり、思考力を鍛えられてきたと思いますので、そういった努力を継続することで、事実と虚偽を見分ける力を養っていくことを期待しています。

最後に、皆さんが立教英国学院で学んだことを活かしながら、将来、日本と英国の架け橋として、また、世界に通用する国際人として活躍していくことを心からお祈りして、私からの祝辞とさせていただきます。

―目次―

	ページ
卒業終業礼拝	1～5
祝辞	1
卒業生スピーチ	2～5
３学期の行事	6～7
アウティング	8～9
特集 Language in use 立教英国学院の「英語」	10～11
第３回　チャプレンより	12
＊コラム＊	
私の思い・気づき①	1
私の思い・気づき②	10
退職される先生方	12

卒業生スピーチ

小六　矢野　正徒

「立教に入ってみる？」

これが一番最初に母に言われた言葉です。そのとき、僕は、気安く

「別にいいよ」

と言ってしまいました。しかし、あとから寮生活だと気づいて、びっくりしました。家族から離れるなんて少し厳しいと思いましたが、やめようと思ってももう手遅れでした。

入学試験の日がやってきました。緊張しましたが、結構、受かる自信がありました。試験が終わってすぐ友達ができました。こんなに早くできるとは思ってもみませんでした。今も友達です。

いよいよイギリスへ旅立つ日がきました。ぴしっとしたワイシャツとズボン、そしてネクタイを身につけての出発でした。着くと、先輩方がたくさんいて、僕は一番の年下でした。後輩がいないのが少し残念でした。僕のドミトリーは日本と違って、レンガだらけでした。結構新しく作られたと思ったら、１９８０年代と言われ、びっくりしました。

僕のドミトリーのメンバーは、小五と中一でした。アンパッキングが終わり、昼食の時間になりました。家で、ナイフとフォークの練習をしてきたので、その成果を見せてやろうと思ったのに、食べ物が切れなかったり、床に落としそうになったりして、大変でした。今は大丈夫です。

食事が終わり、入学式が始まりました。母は後ろで座っており、ずっと僕のことを見つめていました。僕は、聖歌を歌ったり、校長先生から、バッジをもらったりしました。特別な学校だなあと感じました。

授業が始まり、普通の生活も始まり、だんだんと慣れてきました。やがて、部活にも入り、たくさん仲の良い先輩ができました。もちろん、全てがうまくいったわけではなく、問題も起きました。例えば、先輩に生意気なことをしてしまったり、言うことを聞かなかったり、テーブルマナーがきちんとしていなかったりして、注意されたこともありました。

今もそうです。でも大丈夫です。中学生になったら、成長します。見ていてください。

僕は、この二年間で、勉強の仕方、人と一緒に暮らす力を身につけてきました。僕が立教に入ったのは、こういう力が将来に役立つと思ったからです。最初は親と離れるのはいやでしたが、先輩方と一緒に生活するのも楽しいと思いました。

今まで、僕のことを支えてくれた家族、担任の先生、先輩方、ありがとうございました。これから中学生になったら忙しくなります。期末試験もあります。勉強することが多くなるでしょう。後輩もでき、自分が先輩らしくならなければいけないので、人にあまえずに頑張りたいと思います。そして、自分の思い通りにいかなくなることも増え、わがままを捨てなければいけないと思います。それはとても難しいことだと思います。だからみなさん、僕もみなさんのことを応援しますので、僕のことも応援してください。

【3 学期の行事】

1 月 8 日	始業礼拝
1 月 9 日	高等部実力テスト
1 月 15 日	大学センター試験[英語]を全校で実施
1 月 21 日	全校新春かるた大会
1 月 21 日～28 日	Millais School からの交換留学生滞在
1 月 22 日	実用英語技能検定　一次試験（2 級・準 2 級・3 級・4 級） 合唱コンクール
1 月 28 日～31 日	ブレイク
1 月 30 日	ロンドンアウティング
1 月 31 日	生徒会役員選挙
2 月 4 日	久保田氏　情報教育　講演会
2 月 5 日	第 74 回漢字書き取りコンクール
2 月 22 日～2 月 27 日	期末試験
3 月 4 日	卒業終業礼拝
3 月 5 日～3 月 11 日	Millais School、Forest School、Wolverhampton Grammar School にて本校生徒短期留学希望者ホームステイ
3 月 6 日～3 月 10 日	高等部 2 年生補習

中三　柳田　麗安

二〇一四年の春、私はこの立教英国学院の大家族の一員となった。これから始まる新しい生活に胸を弾ませていた。初めの一週間はこの環境に慣れるので精一杯でとても大変だった。

中一は鮒田忠治、石橋英知、小池直紀、森岡星奈、大石桜子、新貝瞭、わたしの七人でスタートした。初めの頃は女子が三人しかおらず、まだどう接したらいいのかわからなくて、一学期に一回は絶交していた。

立教に来て、はじめての行事は球技大会だった。私はドッチボールを選んだ。まだ新しい生活についていけず、戸惑いを隠しきれなかったが、たくさんの先輩達が優しく接してくれて、球技大会当日はもちろん、練習の時もとても楽しむことができた。

二学期になって、中澤大輝が新入生として加わった。自分よりも新しい人が来て、もう自分は新入生ではないのだと実感した。

初めてのオープンディでは経験者が一人しかおらず、模型の作り方も模造紙の書き方も、裏紙の貼り方も何もかもが初めてで何から手をつけていいのかすらわからなかった。

テーマはさるかに合戦。作業期間中、放課後一度ドミトリーにシャワーを浴びに帰ったら教室に戻らないでドミトリーで汗だくになりながら鬼ごっこをしていた。当時副担任だった齊藤亜沙子先生を何度も呼びに来させた。今思えば放課後に作業をしないなんて考えられない。

三学期の合唱コンクールは旅立ちの日に、を歌った。伴奏などすべて高一の先輩たちに任せっきりで、ただ言われたように歌って、指摘されたところを直すだけだった。その時は高一の先輩たちがとても大きくて大人に見えた。

中二になって山本花奈が来た。今では考えられないくらい静かで、話しかけても「おう」というばかりだった。そして、どの行事にも二回目の、という文字がつくようになった。

中二のオープンデイのテーマは「ゆるキャラ」だった。一度経験したからか、去年よりはみんなのやる気が上がった気がした。先輩たちの作品を参考にしながら黙々と作業を進めていった。実をいうと当時の中三の去年のアイディアを少し頂戴した。私と同じくらいの大きさのふなっしーの模型を作ったり、写真が撮れる場所を作ったり、中一の時に比べたらだいぶ完成度があがった。でもやっぱり九人では限界があった。背景には絵を描かずまっ黄色でぬりつぶした。その代わりにたくさんの工夫をした。結果はなんと、総合三位！想像以上の成績にみんながとても喜んだ。これが今年のオープンディへのやる気へと繋がったのかもしれない。

三学期の合唱コンクールではアンパンマンマーチを歌った。練習も本番もとても楽しくて、これもいい思い出になった。

中二の三学期で新貝君が立教を離れることになった。二年間ではじめて経験する別れでこの時、仲間は入ってくるだけじゃなくて、いなくなることもあるのだと思った。新貝君のお別れ会をした。みんなで歌って踊って、騒いで、一人ずつメッセージを言った。その夜はドミトリーでみんなで号泣した。

中三になった。帰宅帰寮名簿を書くときにあ然とした。星野薫子、小泉舞花、栗原涼、髙濵華奈、鶴岡麗良が入ってきた。続いてドミトリー表をみてまたあ然とした。新入生２人と私だけ。二年間この学校で生活して来たはずなのに、全く新しい世界に来たようだった。何を話したらいい？どう接したらいい？これからこの人たちとうまくやっていけるか？はじめは、一気に倍以上にも増えた女子の数にただ圧倒されるだけで、怖かった。そんな自分にもイライラしていた。元メンと新入生で完全に固まってしまっていた。正直、中二の頃に戻りたい、中二のメンバーのままで中三に上がりたいと心から思っていた。

しかし、その思いは、球技大会、アウティング、ウィンブルドン、ホームスティなど数々の行事を通じて徐々に薄れていった。特に、オープンディは元メンと新入生との壁をなくす最大のきっかけだった。

三度目になるオープンディは、二学期からはいってきた速水理名、呉悠輔、大川太一を新入生として迎え計十六人で作業に取り掛かった。夏休み前に決めていたテーマを二学期になってからいきなりポケモンに変えた。放課後に当番制で作る裏紙が去年よりずっと早いスピードで溜まっていった。体育館班と教室班に分ける時もこんなに人数がいたのか、と驚いた。去年のふなっしーの何倍もの大きさのリザードンを作り、背景にはそれぞれちゃんとたくさんお店の絵を描いた。話し合いの時に、ほんとにこんなに沢山の模型ができるのか？こんなに沢山の背景が描けるのか？と不安になったことが嘘みたいだった。みんながみんな、自分たちの作品に手応えを感じていた。そして、結果は堂々の総合第一位！とても嬉しかった。みんなで舞台に上がってくす玉を割ったことはきっとこの先も、大切ないい思い出として残るだろう。

三学期には、遠藤百夏、途中から来た草野雄大、鴨志田桃奈をあわせて十九人になった。

今年の合唱コンクールで私は伴奏をすることになった。ピアノが弾けなくて、放課後の練習の時に何回も伴奏が止まってしまってもちゃんと練習にきてくれて、とても嬉しかった。ありがとう。コンクール前日の夜、小池とコンクールのことでケンカをして泣きそうになった。「そんな文句があるならもう出なくてもいいよ。」本当にそう思っていた。でも、当日出番が終わってみると、やっぱり全員で歌えてよかったな、と思うことができた。

そして、今日は中学生でいられる最後の日。私たちの中学校生活はまだ、スタートしたばかりだと思っていた。楽しかった。本当にあっという間だった。こんなことを思えるのは、優しくしてくれた先輩達や、いつも支えてくれた副担任だった齊藤亜沙子先生、齋藤桃子先生、金子先生や他の先生方のおかげだ。でも一番は小川先生がいたからだろう。

小川先生は、自習中に紙飛行機を飛ばした時も、密菓子がばれたときも、椅子を投げて壊して窓から破片を投げ捨てたときも、下級生のドミトリーにドミ侵してベットを折った時も、いつもちゃんと怒ってくれた。いつも、私たちのくだらない冗談につきあってくれた。クラスのことに一生懸命になってくれた。中一のとき期末のあと、近くの森や丘に散歩につれていってくれた。期末期間中に質問したいと言えば、文句を言いながらも十二時までつきあってくれた。オープンディで模型の作り方を教えてくれたのも、合唱コンクールでアンパンマンのマーチを歌おうと言い出したのも小川先生だった。

中一から中二に、中二から中三に上がるたびに、「担任、また先生なのか」といっているけれど、みんな内心は「先生で良かった、高校生になってもずっと先生が担任がいい。」と思っているのだ。恥ずかしくて普段はちゃんと言えないけれど、先生がいないところでみんなそう言っている。私の人生の中で一度しかない中学校生活の中で担任の先生は一人しかいない。それが小川先生で良かったと思う。来年になれば、新しい仲間がたくさん増えて、もしかしたらクラスがわかれてしまうかもしれない。わかれて欲しくない。このクラスの一員になれてよかった。私はなんだかんだいって、このクラスが好きだ。そして、小川先生が大好きだ。

来学期から私たちは高校生になる。高校生は、中学生と比べたら勉強量は多いし、期末の教科数も多くなる。後輩よりも先輩とよばれるほうが多くなる。そして、次第に学校を引っ張っていく存在になる。また、たくさん入ってくる新しい仲間とうまく付き合っていかなければならない。そんな中で私はこの、中学三年間で学んだことや、経験したことを活かしながら、これから先の高校三年間をより充実したものにしていきたいと思う。

三年間ありがとうございました。そして、こんな私たちですが、これからもよろしくお願いします。

2016 年度卒業生スピーチ

H3-1 Kaito Imai

Today is the day when I will be able to step up to my University, which I am very happy about. On the other hand, I am not going to be a part of this school from tomorrow, which is a sad thing for me. My six years at Rikkyo flew by like a boat down a waterfall, time flies as in the proverb. However, at times, when I was having trouble with my end of term exams, time did not pass as quickly. I have lots of memories with the campus, nature, students, and teachers. I still cannot imagine that I am going to leave here and I will not be able to see all of you regularly at school.

In Rikkyo, I had various opportunities to speak English with students and native people. Especially, when I was in middle school, I went to towns near my school to ask questions to locals. For example, I remember that I asked one elderly man whether he knew my school or not. I asked only this question to around ten people in one period. These short conversations encouraged me to speak English aloud to British people even though I made some grammatical mistakes and they sometimes kindly corrected my English. I realized that it is important to work hard to learn to speak what I really wanted to say. Then other people tried to listen and understand me. Not saying anything doesn't achieve anything. Other activities such as field works, belling at St Nicolas Church in Cranleigh in 2011, and a week long exchange programme with Thomas Hardye School in 2015 helped me to improve greatly my English skills.

Homestay was the best occasion to embrace the British culture. I have stayed with sixteen different families during my six years at Rikkyo. I think that it was a privilege to stay with so many different families. Some host families were very friendly and I wanted to stay there again, but others were not. But in total, I gained important experiences. As I mentioned before, host families were sometimes very hospitable. I was able to ask anything I wanted and I enjoyed talking with them about the difference between Japan and the UK. These happy memories are still in my mind and I often think that I want to meet them again. However, some families were not as kind to me. I still do not know the reason. Maybe they didn't like my daily life attitude. But it was good for me to solve these relationships and it made me think how I should deal with them or how I should make them feel more comfortable. I tried talking with them about their interests and found common interests. Sometimes it worked and sometimes it didn't. When I was feeling down, I always told myself that these bad experience would lead to success in different ways. Homestay was also a great opportunity to take a look at myself again to find my faults so that I can become a better person to be able to contribute to society in the future..

In comparison with outside activities of Rikkyo, I had so many happy and troublesome memories in Rikkyo. Before we got a huge water storage tank, there were many times I could not wash the foam away from my head because of the water shortage. The water from shower suddenly stopped and I wore my gown with foam on my head and I went outside to wash it away in the rain. Unfortunately, it did not work well. Finally, I used the little amount of cold water from the tap to wash it away. Unfortunately I got headache afterwards. So you should not wash your hair in the rain! Now, there is a huge water tank and a generator in my school, so students do not have the same difficulties in daily life. I enjoyed my school life with my classmates day and night, sometimes after lights out. I could not see my parents so often, but my friends and teachers cheered me up a lot during my studies and club activities. That is why I was able to get to this point.

Reading Marathon, this was one of my most important routines at school. It taught me that studying English is a lot of fun. I started to read it from April 2011, when I was a middle school 1 student. In the beginning, as my English vocabulary was not substantial enough, it took over one hour to complete it every day. I used my electronic dictionary and searched the meaning of all words in the article, and sometimes I even searched the meaning of the word, "like ". As I became older year by year, I needed to use it less and less often and I could submit the work in ten minutes, except Mr Kobayashi's. His questions were very complex, which means his questions were very interesting, so I read his article very carefully to understand it perfectly every time. I did not want to make any mistakes, so I worked very hard on them.

However, when I moved to high school, I started to focus on thinking about whether my way of studying would improve my English to an advanced enough level. Actually, I failed the Eiken grade pre1 and FCE over three times each. I had been doing Reading Marathon everyday, but my reading skills were not advanced enough to pass by their standards. Last year, one of my English teachers gave me advice to read articles more difficult than Reading Marathon and tackle interpreting an English text, to learn how to structure sentences. So, I bought some books of the content for myself. After I started, I felt that the way of my reading had changed, I was able to understand the structure of difficult sentences by separating clauses automatically. I even started to read newspaper in the staff room. I used to read only tennis articles, but Mr Kurahsina, my class teacher instructed me not to do this. He told me to read articles which were not about tennis. So I started to read different articles especially ones about business every day because I was interested in studying business management at university. Although when Mr Kurashina was not at school on every Saturday, I checked his desk in the staff room to make sure he wasn't in, and I secretly read some tennis articles as well. Last year, I finally passed FCE, Eiken, and IELTS score for British universities. I found that the small changes in study techniques gave me incredible progression. It is also important to memorise English vocabulary using "the Target," an English vocabulary book. But I strongly recommend you to do these things to study English as well. I have some more advice on studying English but I will stop here for now.

During my time at Rikkyo, I have gained many useful skills and common sense for life as an adult. I am so pleased to have studied and lived here with my wonderful friends, moreover I was lucky enough to have teachers who looked after me as my own parents, and I always felt safe and secure. Rikkyo is my second home, even once I leave here. I am looking forward to coming back here as an old boy one day. " Be the person who other people want to rely on and feel not want to leave from their side" . Miss Umeda, my modern Japanese teacher told me in our final lesson and I was impressed with the phrase very much. I do not feel like I am that person yet, so I will gain more knowledge at University and become the person she described and the person I want to be.

Last of all, I would like to say thank you to my classmates, older students who have graduated already, younger students, all the teachers, kitchen staffs, and cleaning ladies. If it were not for their support, I would not be the person I am today. I will not forget all six years' of your support and I will not let it go to waste in the future. I also want to say huge thank you to my parents. They worked very hard to pay for expensive tuition fees for six years and the occasional visits to the UK to see me. I will go to King's College London, so they will still have to work hard for a few more years for me. I would like to help their job in my spare time and I will help and be dutiful to my parents for the rest of my time.

Thank you for your patience throughout my long speech and I will see you again soon.
Thank you very much.

6 年前の入学式

高三―二　柏樹　健生

この学校に五年間ほどいた僕は多くのことを学んだ。勉強、生活態度、人間関係。それだけではないけれど。とりあえず多くのことを。今でもそうかもしれないが、どうしようもない僕を少しは変えてくれた。

印象に残っていること。やはり、立教生活初日。あの日だけ全てを思い出すことができる。けれどあの日は最悪。本当に最悪。同期の一つ下の後輩に指をさされ、『君、中一？』と聞かれ、英語ができるペテン師、いや悪魔？のせいで初日の就寝後に怒鳴られた。散々な目にあった。初日は最悪。

好きな行事。オープンデイ。準備期間は好きなことはできないし、くだらないことで喧嘩しちゃうし、たまに途中で何作っているのかわからなくなるし。つまらないことばかりだけど、当日だけは楽しいことだらけ。やはり、楽しいことだらけだと人生はつまらないのだろう。苦しかったり、つまらなかったりする日々を乗り越えた後の楽しさは格別。それを認識させてくれるのがオープンデイ。すばらしさはそれだけではないけれど。

些細なことで人は変われる。それは本当。僕にとって些細なことは「数学」。この学校にきて、苦手で嫌いな数学を好きになった。中一の三学期に僕はこの学校に入学したが、それまでほとんど勉強はしてこなかった。けれど、数学を好きになってから、僕は数学の勉強だけはそこそこやった。今でも僕の得意科目。自分を変えてくれるきっかけを見つけることはとても難しいけれど、やはり探そうとする姿勢は大事。さらに立教生は一人ではない。ここ立教では生徒や先生がすぐ横にいる。だから、探しものは見つかりやすい。

僕には好きな言葉がある。

「今、汝は画れり」

意味：自分で自分の見切りをつけるな

漢字：『いま』は now の『今』、『なんじ』は you の『汝』、『かぎ』は計画の『画』（計画の意味はない）

これは中国の昔の儒家、孔子の言葉。

この言葉は高二の冬に見つけた。立教では生活が限定されている。外には自由に出れないし、ネットは自由に使えないし。自由が制限されている。でも、その中で自分に見切りをつけずに生きていき、自分があらゆる可能性を持っていると思うことは立教生活に大きな意味を与える。それは人生においても同じだと思う。自分が本当にやりたいことがあるなら、周りからどんな反対があっても、しっかりその誠意を見せつつ、貫き通してください。全てを投げ捨てる価値があるなら、捨ててください。しっかりと考えた判断なら絶対に後悔はしない。投げ捨てた僕が保証します。

手紙

目の前、ビデオ越しにいる高三へ

二回目になる人もいるけれど、久しぶり。二学期が終わってから、ほとんど君達とは連絡をとらなかった。受験があったし。

二学期が終わった後の受験生活の中で辛い時はもちろんあった。その時僕は自分の事でいっぱいになるけど、少し時間が経つと君達を思い返す。楽しかったなとか。行事また一緒にやりたいなとか。戻りたいなとか。何してるのかなとか。すると自然と手はログアウトしたはずの SNS に手が伸びる。そのようなことが三回くらい。僕は何かあると君達を考えてしまう。君達は僕にとってそういう存在。

僕達はオープンデイや合唱コンなどの行事に熱をそそいだ。そういう行事では僕達は団結して大きくなる。大きくなるたびに僕達は一人一人成長する。それが僕にはたまらなかった。でも、行事の話だけではなく、たまにだらける。いや、たまにじゃないかも。結構な頻度で。僕達は崩れる。その度に自分に対しても色々と腹立たしくなるけど、その内僕の気は収まる。僕達はメリハリがあるのか、ないのかよくわからない。僕達は僕にとってそういう存在。

もし君達全員が絶体絶命のピンチで、もしその状況から救うことができる手立てを持つヒーローが僕だったとしても、僕は君達を助けない。なぜなら、君達は僕と切磋琢磨生活してきたのだから。僕がもしヒーローなら、君達もヒーロー。僕がその手立てを持つなら、君達もその手立てを持つ。そのはず。かなり極端な例だけれども、僕達はそんな関係だと思う。ほんのそこらの人達とは違う。僕達は僕にとってそういう存在。

そんな僕達はもうバラバラ。もうあの日々は帰ってこない。だから、もう僕達がどういう存在かを認識することはおそらくもうない。悲しいけれど、時間が僕達が一緒にいることを許してくれない。仕方がない。

最後に言う。僕は君達が応援してくれた以上に、僕は君達の目指すものを応援します。辛くなった時、周りをみてください。どこかに僕達がいます。いつでも支えてくれる僕達がいます。そんな僕達です。ありがとう。恥ずかしいから、こんなことはあんまり言いたくないけど、僕は君達が好きです。君達は僕の人生を変えてくれた。ほんとうにありがとう。

二〇一七年　三月　四日

高三―二　六番　柏樹健生より

追伸：日本でもみんなで遊びましょう！

センター英語

三学期が始まり、ちょうど一週間経った。児童生徒もだんだんと落ち着き、いつもの光景が学校に戻ってきたように思える。毎年、そうしたタイミングで学校行事の「全校センター英語受験」が実施される。日本で本番を受験している高校三年生を除き、小学生から高校二年生までの全校生徒がセンター試験の英語問題に挑戦する。

毎年、嬉しく思うのは、小中学生の中からも、

「あの問題正解していた！」

「問〇の答って△だよね？」

という会話がちらほら聞こえてくることだ。正解した喜びはもちろん、日常の授業の成果が手に取って感じられた瞬間なのだと思う。

一方で、高校生は、

「昨年に比べ〇点得点が上昇した。」

「今年は△点だった。」

など現実的な話が多い。受験生としての意識が芽生え始めているのだとすると、これも喜ばしい話である。

今年の最高点は高校一年生の一九四点。一一五点を取った中学一年生もいた。日ごろ、日本の学校より「英語」に触れる機会が多い立教英国学院の生徒たち。近年、社会的にも英語の必要性が声高に叫ばれ続け、国際化を推進していく流れは益々加速している。この地で体得したツールを将来様々な場所で存分に発揮してもらいたい。

第74回 漢字書き取りコンクール

試験問題にチャレンジ！

・戦いに敗れた兵士がカイソウする。

・小説のコウガイに目をとおす。

・各派のリョウシュウが集まる。

いたず　潤走　梗概　領袖

全校新春かるた大会

百人一首

中二　小沼　美希子

昨日は百人一首大会だった。

私は去年の百人一首大会では四枚か五枚しか取れず、来年はもう少し取れるように頑張りたいと作文にかいてホームページに載った記憶がある。今年の結果は九枚。そして、学年対抗の団体では平均七・六枚で我々中学二年生が優勝することが出来た。一学期に新入生が二人、二学期にも二人の新入生が入って合計十人となった中学二年生。その中に、強豪のHさん。今回はその子が一八枚とってくれて、とても良い結果にすることが出来た。

最初は就寝準備十分前に、一日ずつ一～二十、二一～四十……という形で練習を重ねていった。ほぼやる気なし、面倒くさいと言う雰囲気の中で始まった練習だったが、日が近づくごとに

「百人一首やろう」

授業でも

「先生、百人一首！」

と言う声が響くようになった。私も、最初はそこまで本気でやるつもりはなかったけれど、去年よりは多い枚数を取りたいという思いからか、やっていくうちにやる気が出た。

そして、当日。私は二回戦目の座「葵」で強豪Hさんと一緒に、高校一年生二人、高校二年生三人の中で戦った。読まれた四十枚のうち、五枚ほど覚えている句が読まれ下の句で取った句を合わせると九枚。私としては中々の結果だった。

そして、今日。表彰が行われ、結果は個人は高校一年生のOさんが二二枚で優勝、団体では我々中学二年生が優勝という良い結果になった。来年は一五枚を目指して頑張りたい

3学期の行事

私の思い・気づき①

冬休みの思い出："パリ十字架少年合唱団"

中２　吉岡　美緒

私は、今回の冬休みに東京芸術劇場へコンサートを聴きに行った。このコンサートは、私にとって初めての少年合唱団のクリスマスコンサートであった。私はクリスマスコンサートと言えば、ベートーベンの交響曲第九番とかシャンパルティエの真夜中のミサをオーケストラで演奏しているイメージを持っていたので、演奏を聴くまでは合唱と音楽が少しおとなしすぎるのではないかと思っていた。

でも、イタリアの有名な作曲家ジュリオ・ガッチーニ作のアヴェ・マリアを聞いたとき、私はさっきまでの考えを恥ずかしいと思った。なぜならば、その高声が本当に天に昇りそうなほど高く、そして美しかったからだ。そのほかにもフランスで 16 世紀に作られたとされる有名な曲「荒野の果てに」や、この少年合唱団芸術監督であり、名誉オルガニストでもあるユーゴ・ギュラティエレスが編曲した「クリスマスは来たれり」などもふんわりとやさしいオルガンの音と、厚い高らかなボーイズ・ソプラノがあわさって、まさしく「芸術」であった。

そんな芸術を生みだした合唱団を少し知りたくなって家に帰って調べてみたら、なんと彼らは"パリの十字架少年合唱団"又は平和の使者と呼ばれている、世界で最もすばらしい少年合唱団なのだということが分かった。そして、80ヶ国以上を飛びまわる彼らたちとは、少しにている気分を立教では味わえる気がした。

合唱コンクール

それぞれの良さが心に響いた合唱コンクール

一月二一日、生徒会の主催で、全校合唱コンクールが行われました。合唱の準備が本格的にスタートしたのは、三学期が始まってからです。実質二週間ほどの練習期間で各クラスの曲を仕上げなければなりません。今年の生徒会で決められた審査基準は、ハーモニーの良さ、曲想の表現、ステージ上でのマナーです。短期交換留学で本校に滞在中のミレースクールの生徒たちも審査に参加して行われました。

総合優勝は高等部二年、一人ひとりが大きな声、素敵な笑顔で本当に楽しそうに歌っていました。間奏にバイオリンの演奏を入れたり、パートごとに体の向きを変えて観客を楽しませたり、ソロのパートも設けたりといろいろに工夫も凝らし、さすが高校二年生と他学年を唸らせる素晴らしい発表を見せてくれました。また、伴奏者賞、指揮者賞、ミレースクールの生徒からのMillais Prizeも高二が受賞しました。

総合二位になったのは何と小学六年生、二人だけの発表でしたが、二人ともそれぞれソロで歌い、その堂々とした素敵なハーモニーに心を動かされました。ステージマナー賞、校長特別賞も小学六年生が受賞しています。

技術の巧拙よりも、伝えたいと本気で取り組むその気持ちが人の心を動かすのだな、ということを非常に強く感じたコンクールになりました。各クラスそれぞれの良さが皆の心に響く、素晴らしい合唱コンクールでした。

「誰のために？」

中二　佐久間　悠生

昨年は「花は咲く」を歌った。二回目になる今年の合唱コンクールでは、「少年時代」を歌うことになった。昨年のこともあって、伴奏をやらなければいけないことは分かっていたけど、なかなかやる気が出なかった。昨年は、冬休み前に楽譜を配られたのに、今年は一週間前だったからだ。そんな中でも人数の少ない中、二つにパートを分けて、いやだと言いながらも頑張ってくれている歌を歌う人達と、指揮者が僕のやる気を出させてくれた。昨年もそうだが、ただ弾くだけでいいと思っていた。今年も最初はそう思っていたが、違った。聴く人のためというのも十パーセントあるが、九十パーセントは指揮者があって伴奏があって歌う、一人と八人のためだ。それに気づいてからは、練習をしまくった。なかなか、下のパートと上のパートが合わず、みんな苦労していた。リハーサルの時も、「ピアノが頑張っているのに」とみんなが言われているとき、みんな頑張っているのにと思った。胸が痛く、悲しかったけど、それからのみんなはすごかった。

発表当日、順番は先生方の後の二番目だった。みんなすごく緊張していたが、僕もすごく緊張した。オープンデイの時もスクールコンサートの時も失敗したからまた失敗すると思っていた。入場するのは意外と早く、すぐに出番が来てしまった。歌詞の出だし、リハーサルの時ぐらい良かった。間奏が終わって二番、一番目の倍良かった。声も大きくなったし、指揮者の顔にも笑みがあったからすこし緊張がほぐれた感じだった。歌も伴奏も順調にすすみ、いよいよ最後あとは、伴奏と指揮だけという時にやってしまった。最後の最後でミスをした。その時にたくさんの事を感じた。伴奏の音がいつもより出ていなかった事、そして、みんなのためだというのに本気を出せなかった自分。それと一音間違えたことを僕はずっと後悔すると思う。

後悔しながらも、来年また任されたら、その時は、百二十パーセントを出し切りたい。（と思います）

生徒会選挙

生徒会役員のメンバーは、生徒会長が一名、高等部副会長が二名、中学部副会長が二名で構成されています。

今年は生徒会長に二名、高等部副会長に二名、中学部副会長に二名が出馬しました。それぞれの候補者には応援演説がなされます。

そしてそれに続いて候補者は、立候補表明と抱負を述べ、さらに自分が選ばれた場合の公約を全校生徒に伝えます。

立教の生徒会役員に求められるものとはどんなものでしょうか。

それは生徒の代表となり行動すること、また行事の縁の下の力持ちとなること、そして生徒の代表として、教員に生徒たちの声を届けることです。

それには、誠実さや生徒をまとめる能力、仕事を素早く、そして確実にこなせる能力、また立教をより良いものにしようとする情熱が求められます。

全校生徒はそれらの素質が候補者にあるのかを見極めるため、演説に続く質疑応答の時間には、それぞれの候補者に鋭い質問がなされ、およそ二時間半にも及ぶ白熱した選挙となりました。

そうして選ばれた新しい生徒会が結成。前の生徒会は引継ぎを行い、引退をします。

より良い学校作りのために、生徒の代表となり頑張ってほしいものです。

アウティング

「満足な思い出をくれたアウティング」

小六　矢野　正徒

今回は、小学生最後のアウティングでした。そう思うと、悲しくなります。その前の日はすごくわくわくしていました。

最初は何と、マダムタッソーに行きました。そこに入ってみると、

「うそ、本物の有名人がいる。」

と思って、よく見てみると、実は蝋人形でした。ここは、たくさん有名な人の蝋人形が置いてある場所でした。

しかし、困ったことにほとんどの人の名前が分かりませんでした。分かるとしてもジョニーデップやボルトやアメリカ大統領のトランプさんぐらいです。その蝋人形と一緒に写真を撮りました。次のコーナーに行ってみると、シャーロックホームズの場面が出てきました。僕は、女性のお医者さんの顔が怖かったです。そして、数分後、あるシャーロックホームズに出てくる男の人にすごく怒られました。きっと遊びでやっているのだろうと思いましたが、それにしてもその怒っている顔が少し面白かったです。先へ進んでみると、乗り物がありました。急に怖い場面から、楽しそうな場面に変わったので、よかったです。その乗り物に乗ると、歴史みたいな感じで流れていきました。これで終わったと思ったら、次は、マーベルに出てくる、アイアンマンやスパイダーマンの蝋人形がありました。かっこよかったです。そこで十分ぐらいの映画を見ました。その映画は４Ｄでした。今まで、３Ｄしか見たことがなかったので、楽しみでした。実際に見てみると、飛び出してきたり、水がかかったりして面白かったです。もちろん、映画も戦い系だったので、それも面白かったです。見終わったら、スターウォーズの展示もあったのですが、時間がなかったのでゆっくり見られず、少し残念でした。

いよいよ、次の場所へ出発します。行き先は、ピカデリーサーカスです。そこに着くと、まるで新宿みたいでした。でも、本当の目的の場所は、大英博物館です。そこは無料なので、とてもお得だと思いました。僕たちが見たのはエジプトのミイラや有名なロゼッタストーンです。本物が見られるからすごいと思いました。（もしかしたら、僕が書いた日記が千年後ぐらいに見つかるかもしれません。いや絶対に見つかります。）他にも日本についての展示場所に行きました。そこには縄文時代から、だいたい現代までのものが並んでいました。一番驚いたのは、縄文土器です。なぜかというと、全く割れていなかったからです。少し疑ってしまいました。面白いと思ったのは、零円のお札の絵があったことです。僕にはなぜ描いたのか少し疑問でしたが、本物が発見されて、それが展示してあるなんてすごいなあと思いました。もちろん、無料で見せることもです。

その後、夕食でした。何を食べたかというと、ハンバーガーです。もちろん専門店です。僕なりの考えでは、町でよく見かけるお店のものとは比べものになりません。すごく美味しかったです。具体的に言うと、ベーコンとバーベキューソースが特に美味しかったです。ちなみに、昼食もそうでした。お昼のお店の名前は、Patty&Bun、夜に食べたお店は、Big Fernand でした。

今回は、小学生最後のアウティングでしたが、前よりももっとよい思い出になりました。特に面白かったところは、大英博物館の日本のコーナーです。動画などでは見たことがあったのですが、実物で見たことはあまりなかったのでそう思いました。中学生になってもアウティングを楽しみたいと思います。今回は本当に楽しかったです。やはり立教に入って正解だと思いました。

アウティング

中三　遠藤　百夏

立教英国学院に入学して、初めてのアウティングに行った。行く前は、どこに行くのかもうっすらとしか聞けなくて、色々心配だった。しかし、当日になってみんながワクワクしている様子を見て、私も楽しみに思った。

バスに乗って、ロンドンに着いた。バスを降りると、おしゃれで明るい町の雰囲気を感じた。班の友達と美味しそうなピザ屋さんに入り、食事を楽しんだ。お金を出すのに慣れなくて苦労したが、店員さんが助けてくださった。焼きたてのピザは本当に美味しくて、幸せに感じた。

次に行った「マダムタッソー」というところでは有名な役者さん、スポーツ選手、政治家や偉人たちのろう人形と写真を撮った。びっくりするほど人形はリアルで、作った人の技術に感心した。その後、シャーロック・ホームズのゲームを楽しんだり、４Ｄのアトラクションを楽しんだ。最近の進んだ技術をたっぷり経験できて、心から「来て良かったなあ」と思えた。

その後、少し買い物やお茶をして、次に行ったのはアラジンのミュージカルだ。ミュージカルを観るのは初めてだったし、とても良い席だったのですごくワクワクした。観て思ったことは、スケールが違いすぎる！ということ。音楽の美しさ、役者さんたちの声量や演技力、ダンスのキレやダンサーさんたちの優雅な舞、そして舞台セットの大がかりさ。全てがとっても美しかった。特に私が一番好きなシーンはアラジンとジャスミンが空飛ぶじゅうたんに乗って「ホール・ニュー・ワールド」を歌うところだ。うっとりするほど、歌声も設備もきれいだった。英語が早口で分からなかったところもあるが、出演者たちのはじける笑顔やダンスを見て、見ている側まで笑顔になり、幸せな気分になれた。私もアラジンやジャスミンのように人への思いやりを忘れずに、笑顔で明るく、ユーモアを持って美しく生きようと思った。

マダムタッソーの英国王室

アラジンの劇場前にて

マダムタッソーのトランプ大統領

Musical 「キンキーブーツ」

高一　松永　朋子

実話だと知ったとき、すごく驚きました。最初は現実味がないなと思いながら見ていて、「どうせミュージカル用に作られた話だろうな。」と考えていたからです。

出演者全員、歌唱力が並みではなく、ただただその衣装といい、歌声といい、全てに感動しました。特に、女装した男性方の脚が綺麗すぎてびっくりしました。抜群のスタイルで最後のランウェイに登場したときは拍手をし続けました。

色々な深いメッセージにも考えさせられました。誰かを受け入れること、やっぱり人生においてそれは大事だなと改めて納得させられました。またクラスで観たことにより、よりミュージカルを楽しめました。皆にとってもサイモンは格好良かったようで、途中のブレイクのときに共感し合うことが出来ました。一回チャーリーが全てを失ったところで私は「ここからどうせ立ち直るんだろう。」とわくわくしていたら、まさかのダンが約束を守ったというオチで「チャーリーは良い人に恵まれたな。」と思いました。

これを観て、私もこれからどんな困難にぶち当たっても頑張ろうと思えました。どんなに忙しくても、どんなに先が不安でも、諦めず明るく生きたいです。来年のレ・ミゼラブルも楽しみにしています。ミュージカルで学ぶことはすごく多いので、これからもたくさんのミュージカルを観たいです。

高二 アウティング

今回はロンドンにあるグローブ座の見学と、ミュージカル「レ・ミゼラブル」の鑑賞を中心に、ロンドン市内を自由に散策する盛りだくさんのアウティングでした。

朝十時に学校を出発し、昼前にロンドンに到着。すぐに解散して昼食がてら自由行動です。学校では食べる機会のないものをたくさん食べようと、何件もハシゴしておなか一杯食べたと話す生徒が多くいました。学校では同学年で集まって食事をする機会はあまりないので、こうやって友達と好きなものを食べるのが楽しくて仕方がないといった様子です。

午後に再集合して、まずはグローブ座の見学に行きました。ここはイギリスの生んだ偉大な作家のひとり、シェイクスピアの作品を多く上演する屋外円形劇場です。大火による建て直しなどを経て、十六世紀当時と同じ設計で再現された木造の劇場の中で、ガイドの女性が生徒の英語のレベルに合わせて、当時から現在までのこの劇場について、わかりやすく楽しく説明してくださいました。

夕食後の自由行動ののち再び集合して、ミュージカル鑑賞となりました。今回観たレ・ミゼラブルは世界的にも有名な作品なので、その名を耳にした生徒が多かった上、昨年度立教英国学院でも、ミュージカル同好会の生徒たちが自主上演したこともあり、興味を持って当日を迎えた生徒が多くいました。ストーリーはもちろん、キャストの演技、歌の迫力、舞台装置や音楽など、一つ一つに感動し、心から楽しんでいました。例え英語が苦手でも、本物に触れることができた喜びは深く心に刻まれたようでした。

終演後、帰校したのは二十三時五十五分。それでも興奮冷めやらぬ、思い出深い一日となりました。

LONDON OUTING

グローブ座見学

主な外出先

P6-M2　マダムタッソー

M3　マダムタッソー、「アラジン」鑑賞

H1　ＵＣＬ、「キンキーブーツ」鑑賞

H2　グローブ座、「レ・ミゼラブル」鑑賞

レ・ミゼラブルの劇場

UCL の構内

UCL で教授のお話を聴く

Millais School 短期留学受け入れ

1 月 21 日から 28 日、Millais School の生徒たちが本校で短期留学をしました。本校生徒と Millais School の生徒の感想を紹介します。

M3　大石　桜子

当日、パートナーに会ったときは私はいつも通りとても緊張していました。

このままではこの１週間どうなってしまうのだろうか、そんな事を考え私は更に不安になってしまいました。しかし周りを見ると先輩、同学年も一生懸命、そして楽しそうに話しているのが見え、「自分も頑張らなければ」と思い、話しかける事が出来ました。

全然喋ろうとしなかった私に先生がくれた「単語でもいいからとりあえず喋ってみる」というアドバイスは私にとって非常に大きいものでした。そんなアドバイスのお陰で夜の時間には一緒に DVD を見たり、部屋で一緒に話したりなどをし、本当にミレースクールに参加してよかったと思いました。

Everyone was so kind, welcoming and funny!
The food was amazing. The view from our dorm was really nice. The lessons were interesting and funny!
I'm so glad I had the opportunity to come here.

Ellie Denyer

Language in use

立教英国学院では、机上の勉強だけではなく、各教科のフィールドワークや部活動、ショッピングなど実際に英語をつかう機会が多くあります。今学期の活動の一部を紹介します。

私の思い・気づき②

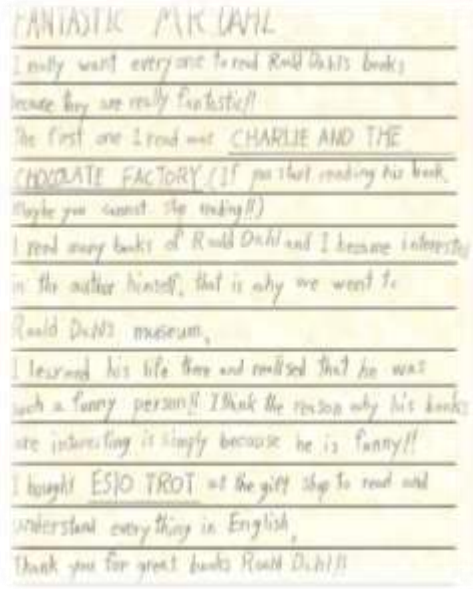
「イギリスで立教に通う意味」

高２　新名　莉果

このお正月、私は祖母の家で過ごした。祖母は私が家を訪ねるといつも、やたらと日本らしいことを私にさせたがる。着物の着付けや、お正月になると書初めの準備を欠かさない。正直にいうと、今までは面倒だなと思ったこともあった。しかし、立教に通いイギリス人との交流が多くなると、海外の人から見れば、日本人は着付けや書初め（書道）が当然できるという印象を強く持たれていることを身をもって実感するようになった。実際には、現代の日本は洋服が主流で着物を着ることなどめったにない。書道も興味をもたなければ、小学校中学校の授業で少し習うくらいで、書道をする機会などなくなってしまう。

私は何のためにイギリスで学び、交流をしているのだろうか。生きた英語を学ぶ為、イギリスの文化に触れる為……。理由は様々だが、私が一方的に学んでいるだけでは、私が日本人である意味がないと感じる。私がなりたいのは、イギリスの文化を熟知した日本人ではなく、日本という国を外国の人に発信できる日本人だ。だから、最近では、祖母の勧める日本文化をとことんやってみることにしている。私が立教生でいる間、日本に触れられるのは長期休暇のときしかない。その時だけでも、思いきり日本に触れたいと思った。国際的な異文化よりも、日本の伝統的な文化に。そして、他のどの国よりも、日本に恥じない日本人になりたいと強く思っている。

この立教で生活し、日本では感じることもなかったことに気付かされたこと、そして、理想とする自分を見つけられたことは、私がイギリスにある立教に通っていることの意味であると感じ、残り一年になった立教生活をもっと意味のある有意義なものにしたいと思う。


FANTASTIC MR DAHL

I really want everyone to read Roald Dahl's books because they are really fantastic!!
The first one I read was CHARLIE AND THE CHOCOLATE FACTORY (If you like reading his book, maybe you cannot stop reading!!)
I read many books of Roald Dahl and I became interested in the author himself, that is why we went to Roald Dahl's museum.
I learned his life there and realised that he was such a funny person!! I think the reason why his books are interesting is simply because he is funny!!
I bought ESIO TROT at the gift shop to read and understand everything in English.
Thank you for great books Roald Dahl!!

MR.DAHL についての essay
P6 石川　容佑

Active English

今年度から始まった小学生の Active English ではイギリス人児童文学作家 Roald Dahl の作品を中心に学習に取り組みました。Charlie and the Chocolate Factory, the James and the Giant Peach, the BFG, George's Marvelous Medicine, Matilda, Esio Trot, Fantastic Mr Fox など、この一年で多くの作品を学ぶことができました。1 年間のまとめとして、著者についての理解を深めるため、2 月 4 日（土）に小学 6 年生はバッキンガムシャーにある Roald Dahl Museum に行きました。

Pen Pal

中学部１年の生徒と地元の日本文化に興味をもつ中学生がペンパルになり、メールで連絡を取り合っています。今学期は直接会って本校で日本文化の紹介をしました。本校生徒が日本茶を出しておもてなしをしたり、一緒に琴の練習をしたりしました。

短期留学

今年の春休みに生徒たちはMillais School、Forest School、Wolverhampton Grammar School へ１週間の短期留学に行っています。生徒たちはホストファミリーやバディの家から学校へ通います。

放課後の時間にサッカー観戦へ行きました。

現地校体験

小学生が地元の Pennthorpe Preparatory School の１日を体験しました。

学校に通う児童たちと同じ時間８時 20 分に本校教諭が学校まで送り届けこの日は始まりました。バディの児童が２人ずつつき、１限算数、２限コンピューターグラフィック、３限フランス語、４限英語の授業に一緒に参加しました。休み時間には、バスケットボール、サッカーを楽しみ、お別れ前には連絡先を交換しました。これからもここで出会った友だちとの関係が続くことを願っています。

ホームステイ

１学期は、ハーフターム、夏休みの最初の１週間。３学期は春休みの最初の１週間の年３回ホームステイの機会があります。希望者は終業礼拝の日、地元のホームステイ先に出発しました。

第３回

チャプレンより

與賀田チャプレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をしてください。

遠藤周作の『沈黙』がスコセッシ監督によって映画化され、日本でも、イギリスでも公開され話題となっています。江戸時代のキリシタン弾圧という限界状況を通して、遠藤周作自身の信仰を描くという小説です。

この『沈黙』の舞台である長崎とその西百キロに浮かぶ五島列島へと、以前私が牧師をしていた教会の信徒の方たちと巡礼に行ったことがあります。

戦国時代や江戸時代だけではなく、幕末から明治にかけても、キリスト教迫害の歴史が日本にはあります。明治の始めに、長崎の浦上のクリスチャン、約三千四百人は全国約二十箇所に連れて行かれ、六百十三名が殉教しました。たった百五十年ほど前のことです。

長崎から西へ約百キロ離れた五島列島からは、そう簡単に全国各地に連れて行くことができません。そこで、同じ島内で、同じ島民によって迫害が始まったのです。ひどい牢ですと、たった六坪に二百人が押し込まれて衰弱死をしました。拷問で殺された人も数多くいました。

クリスチャンだから殺してもいいという理由で、刀の試し斬りのため、夜中に家に押し入られ、妊娠している女性も含めて六名が切り捨てられたということもあります。

明治の二十年頃、ある司祭が臨終の信徒を看取るため、嵐の中十一人の若い信徒達と共に小舟で長崎本土から戻る途中に遭難してしまいます。助けに来た島の男達が船に乗り込むのですが、船には新しい聖堂を建てる資金がありました。そのお金のために、司祭含む十二人のクリスチャンは殺されたのです。

これが何故わかったかというと、助けに来た男達の中に一人のクリスチャンがいたのです。彼は周りが怖くて止めることができず、司祭たちを見捨てたのでした。それは彼が臨終の時に、いてもたってもいられず告白したことによってわかった事実です。

これらのエピソードはガイドブックや文献の中には余り描かれていません。というのは、これが同じ島の中でたった百五十年ほど前に起こった出来事だからです。加害者と被害者と傍観者に、逃げ場がないのです。ずっと顔を合わさなければいけない、それが島の環境なのです。

そこにはどれほどの葛藤があることでしょうか。加害者側は、罪意識を持つかもしれません。あるいは、かえって差別意識を持つかもしれません。被害者側も、彼らを赦せないままかもしれません。何十年経った後でも、殺した子孫と殺された子孫が同じ島の中に、逃げ場のない島の中で生活しているのです。

長崎のクリスチャンたちは、様々な時代において何を待ち望みながら、祈っていたのでしょうか。

それは自由です。一つは信仰の自由があるでしょう。もう迫害されない、いじめられないという安心、平和という自由でもあります。それをもっと深めますと、罪からの自由、赦しということに他なりません。やってしまったという罪意識からの自由だけではありません。罪を赦すことができない、どうしても憎い、このことからの自由、自分の人生に絡みついた様々なことからほどかれるということ、これが罪からの自由、赦しなのです。

復活日（イースター）の物語では、十字架に架けられて三日目に復活されたイエスが、家に隠れて集っていた弟子たちの真ん中に現れた、という箇所が読まれます。弟子たちは互いに罪の意識を持っていました。彼らは自分も殺されるのではないか、という恐れのためイエスを見捨て逃げ出していたのです。彼らは被害者でもあり加害者であり傍観者でもあったのです。

そこに主イエスが現れ、手を広げられます。その手には十字架の傷、弟子たちがつけてしまった傷が刻まれたままです。イエスは傷ついたままの手を広げられて、彼らに「平和があるように」と告げられ、パンとぶどう酒、聖餐(せいさん)（ミサ）の準備をされるのです。

傷ついた手を見た時、その手が自分に差し伸べられた時、その手からパンとぶどう酒が、自分たちの「人を傷つけた手」、「人に傷つけられた手」に渡された時、どれだけの自由を、赦しを、愛を、彼らは受けたことでしょうか。

人は愛されたから、誰かを愛そうとすることができます。赦されたから、誰かを赦そうとすることができます。この喜びを伝えるために、教会は作られ、世界中に広がり、毎週日曜日に聖餐式が続けられているのです。

ですから、長崎の人々にとって、キリスト教禁制の二五〇年の時を経て、聖餐式にあずかることがどれほどの喜びだったことでしょうか。明治になっても自分の親や子供が殺された中で、日々の中で、聖餐式にあずかることがどれほどの慰めとなったことでしょうか。

そして誰よりも、神ご自身が、人々が慰め合い、愛し合い、自由に生きることを、強く待ち望まれているのです。私たちがこのことを深く思いながら、日々を送ることができるよう、お祈りしております

退職される先生方

今年度は、４名の先生が退職されます。写真右から棟近稔先生(理科　40 年勤続)、渡邊千穂先生(国語　6 年勤続)、田中裕紀先生(英語　2 年勤続)、磯田彩先生(養護　4 年勤続)。長い間ありがとうございました。

棟近　稔　校長先生より

1977 年、創立 5 周年の年に来て、40 年間、学校の成長とともに自分も成長させてもらいながら今日までできました。今まで助けていただいた沢山の方々に心から感謝を申し上げます。4 月からは皆で佐藤忠博新校長を支えていってください。立教をよろしくお願いします。

立教英国学院通信の電子配信への切り替えにご協力下さい。ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk